【土木計画学研究・講演集　No.23 (2)　2000年11月】

山裾寺院敷地の地形論的占地特性に関する研究

A topographical study on the site of temples on hilly terrains

山口　一人*，山田圭二郎**，中村　良夫***
by Kazuto YAMAGUCHI , Keijiro YAMADA , Yoshio NAKAMURA

1．はじめに

（1）研究の背景

古来，神聖な対象と考えられてきた山と人々が生活している里との境界である山裾に建立されてきた寺院は，周囲の地形環境と見事に調和した景観を創り出している．このような山裾の特徴ある地形をよく理解して，その地形にあった敷地造成をどのように行ってきたかを知ることは今後の敷地造成に有益であると考えられる．

（2）研究の目的

本研究では，山裾に立地する寺院敷地の占地に注目し，特に占地と関わり合いが深いと考えられる山裾寺院の参道形成と領域形成に焦点をあて，分析を進めることで，山裾というバラエティーに富む地形を各寺院がどのように寺院造成に利用しているかを見出し，山裾寺院の共通してもつ景観的な特徴を見出すことを目的とする．

（3）研究方法と流れ

研究対象として，京都盆地の山裾に立地した地形特性の異なる歴史的な寺院を２８カ所選定した（ただし，今回の研究では宗派・創建時代に関しては考慮していない）．そして，現地踏査を行い，1/2,500 の都市計画地図から得られた等高線データより地形解析モデルツール(formZ RenderZone Radiosity)を用いて３次元画像を作製し，必要な部分においては断面図を作製した．

そして，まず山裾寺院敷地が地形学的にいかなる場所に占地されているかを調べた（2章）．

次に，これらをもとにして山裾寺院の占地に関わり合いが深い参道形成と領域形成に焦点をあて研究を進めた（3章，4章）．

最後に，これらをもとにして地形論的に見た山裾寺院敷地の占地特性を見出し，結論とした．

2．山裾寺院敷地の占地の地形学的特徴

京都盆地の山裾に立地する寺院を 28 選定し，1/25,000 の土地条件図「京都」をもとにこれらの寺院が地形学的にいかなる所に占地されているかを図１のような地形分類図を作製し，分類したものが図２である．これによって得られた，山裾寺院敷地の占地の特徴を以下に記した．

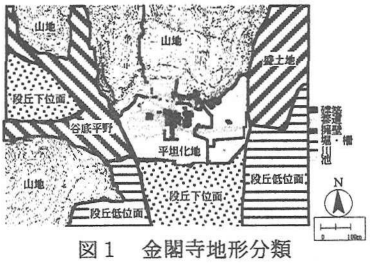


図１　金閣寺地形分類

（1）山裾寺院敷地の地形学的分類

図２より，山裾寺院の敷地のおおかたが段丘と急傾斜扇状地に占地されていることが分かった．寺院敷地を含む段丘及び扇状地を上・中・下に分割し，各区間の中央の標高を y 軸に，勾配を x 軸にしてグラフにしたのが図３である．グラフの中で，寺院敷地のある区間のプロットを黒く塗りつぶした．

図３より，段丘占地型寺院は，中央部のような勾配が小さな所に敷地が造成されていることが多いのに対し，扇状地占地型寺院は，扇頂部のような勾配が大きな所に

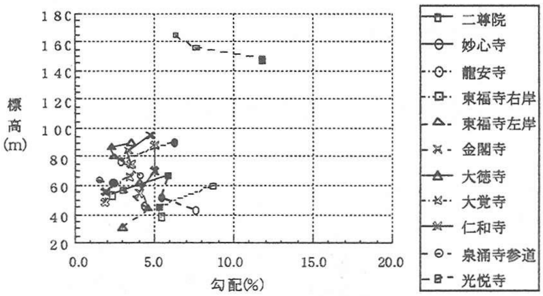
---

keywords：景観，空間整備・設計

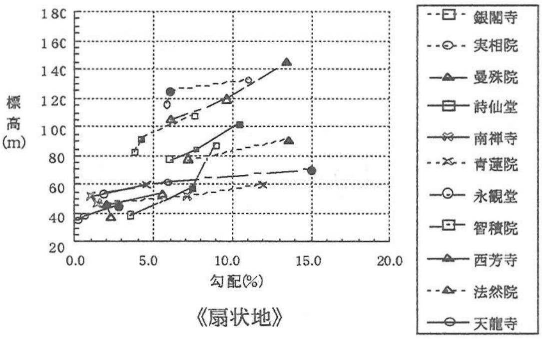
*　学生員　修士課程　京都大学大学院工学研究科土木システム工学専攻
**　正会員　工修　京都大学大学院工学研究科土木システム工学専攻
***フェロー　工博　京都大学大学院工学研究科土木システム工学専攻
(〒606-8501　京都市左京区吉田本町
Tel　075-753-4788 Fax　075-753-4789)

段丘	上部		二尊院（参道）・金閣寺・龍安寺
	中央部		大覚寺・妙心寺・仁和寺・大徳寺・東福寺・知恩院
	先端部		光悦寺
扇状地	急傾斜		銀閣寺・実相院・曼殊院・詩仙堂・南禅寺・青蓮院 泉涌寺（参道）・法然院・高台寺・智積院 永観堂
	緩傾斜		西芳寺・天龍寺
崖錐			常寂光寺・二尊院（寺院建築）
山地斜面	急斜面		華厳寺
	緩斜面	谷	正伝寺・泉涌寺（寺院建築）
		尾根	清水寺・光明寺

図２　山裾寺院の地形分類



《段丘》



《扇状地》

図3　傾斜−標高グラフ

敷地が造成されていることが多いことが分かった．そのため，段丘占地型寺院が原地形にあまり手を加えること無く敷地が造成されているのに対し，扇状地占地型寺院は擁壁などの高低差を埋める処理が施されている場合が多くみられた．

３．山裾型寺院敷地の参道形成にみられる特色

本章では，山裾寺院敷地の地形学的特徴をもとにして，地形との関わりから各寺院の参道の特徴を分析し，山裾寺院の参道の持つ意義を考察した．

（1）参道の定義

本研究で扱う参道は，里から寺院敷地との境目に立つ山門（あるいは三門・総門・惣門・大門・二王門）に至るまでにとどまらず，山門から寺院の中心建築（法堂・金堂・方丈・本堂など）に至る道と主要建築から裏山に延びる道も含めて参道と呼ぶこととし，参道を

- 導入部（里から山門まで）
- アプローチ（山門から主要建築まで）
- 山際（主要建築から奥山まで）

の３区間に分割して，それぞれの区間でみられる参道の特色を把握した．

（2）参道の構成

a）導入部

導入部では，段丘傾斜や扇状地傾斜といった原地形とその曲折を利用することで奥を見えにくくしている寺院が多くみられた．図４は，尾根という原地形と参道の曲折を利用して造られた清水寺の導入部の例である．また，参道形状が直線のものは山門と山門前の階段・擁壁を参道途中から常に見せるという手法がみられた．これは，常に結界である山門を目標にして参道を登っていくため，山門の奥が奥深い敷地に続くことを印象づけている（図5）．

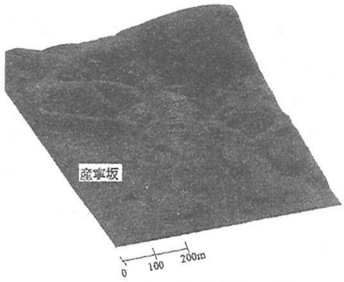


図４　清水寺参道(導入部)

図５　智積院惣門

b）アプローチ

アプローチでも，導入部の参道と同様，原地形を利用

して奥を見えにくくしている寺院がみられた．また，原地形に特徴のない寺院では平面形状に工夫をすることで，奥を見えにくくしている寺院もみられた．図６は，崖錐という原地形を利用して階段を通すことで，仁王門下から上の寺院建築を見えにくくしている常寂光寺のアプローチの例である．図７は，参道を２度直角に曲げることで中門に至るまで寺院建築を見えないようにしている銀閣寺のアプローチの例である．いずれも，奥への期待感の演出がなされているといえる．

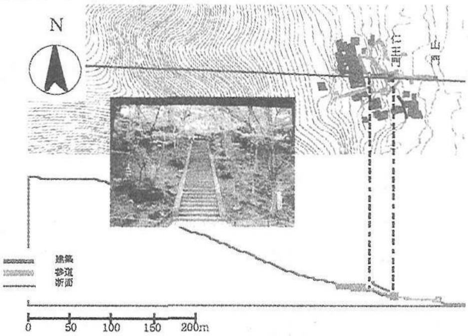


図６　常寂光寺参道（アプローチ）

図７　銀閣寺参道（アプローチ）

c）山際

山際では，散策路を設けているものや庭園あるいは本堂よりも一段上に別の敷地を設けてそこまで参道を通しているものが存在した（図8）．

図８　金閣寺参道（山際）

（３）まとめ

以上のことより，共通していえることは，参道というものが里から導入部・アプローチと参道を登り進むにつれて，徐々に奥深くに入っていく印象を与えるように形成されているということである．また，山際まで参道を通しているものは，山を実体験することで奥深さをより印象づけているといえる．

４．山裾寺院敷地の領域形成にみられる特色

本章では，山裾寺院敷地の地形学的特徴をもとにして，各寺院が周辺地形をどのように利用しているかを把握することで領域形成の手法にみられる特徴を見出していくこととした．

（１）山裾寺院敷地の領域形成の類型

山裾寺院の敷地領域を意識させる演出を次の６つに大別した．また，これらをモデル化したものが図９である．

- 囲繞型（谷間・尾根）
- 端山型
- 借景型
- 崖型
- 川型
- 奥の院型

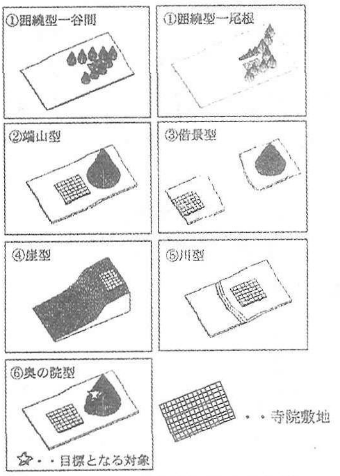


図９　敷地領域演出のモデル

a）囲繞型

寺院敷地が周辺の自然地形によって囲われていて閉鎖性の強い印象をうける寺院である．また，これらを細かくみていくと川の谷間に敷地を占地することで閉鎖性を演出している寺院（図１０）と，寺院敷地に直接接していない尾根に敷地が囲

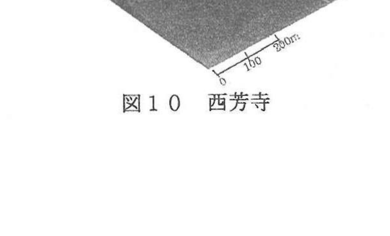


図１０　西芳寺

まれることで閉鎖性を演出している寺院があることが分かった.

b）端山型

寺院の背後に寺院敷地から見て秀麗な山容をもった小山や尾根を控えた寺院で，このような場所に寺院敷地を占地することで，背後の山を寺院内から見せ，寺院領域に視覚的に取り込む演出がなされているといえる.

c）借景型

寺院敷地の一番奥から望む山を控えた寺院である．また，これらを細かく見ていくと寺院から数キロも離れた信仰の対象となる山を借景している寺院（図１１）と，寺院からすぐ向かいに見える山を借景しているような寺院があることが分かった.

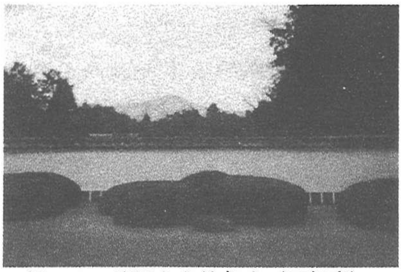


図１１　庭園から比叡山（正伝寺）

これらは，実際に山が寺院敷地の境界となっているわけではないが，寺院敷地内から見せることで寺院領域に視覚的に取り込む演出がなされているといえる.

d）崖型

崖の上に寺院敷地が置かれている寺院で，崖をみせることで敷地境界を明確に示して領域を形成している.

e）川型

寺院敷地を分断する明確な境界である川を見せることで領域を形成している（図１２).

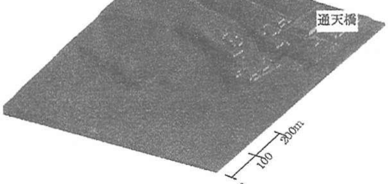


図１２　東福寺

f）奥の院型

寺院の中心となる建築のさらに奥に目標となる対象（奥の院・茶室・滝）がみられる寺院で，その対象によって奥の山を意識づけて山際の領域を寺院内に取り込んでいると把握できる.

（２）まとめ

上であげた演出の中で，囲繞型-谷間・崖型・川型は境界を明確に示すことで領域を形成しているのに対し，囲繞型-尾根・端山型・借景型・奥の院型は寺院敷地に直接接していない周辺地形を視覚的に寺院内に取り込むことにより，境界の曖昧な無限定的領域を形成していると把握できる.

５．おわりに

（１）本研究の成果

①山裾寺院敷地のおおかたが段丘と急傾斜扇状地扇頂部に占地されている.

②山裾寺院の参道を導入部・アプローチ・山際の３つに分割し，それぞれの区間のもつ特徴を分析をした．その結果，山裾寺院の参道は，登り進むにつれて奥深くへ入って行く印象を与える演出が施されていると把握できる.

③山裾寺院の周辺地形を利用して創り出される寺院敷地の領域を図９の７つに分類することができた．そして，その周辺の自然地形との境界を明確にしたり，曖昧にしたりすることで山裾寺院が景観的領域を創り出していると把握できる.

これらから得られる結論は，参道が奥深さを演出することで常に山を感じさせて，「里」と「山」を結びつけ，また，寺院敷地から「山」を望みあるいは「山」に入ることで「山」を感じ，「里」を眺望することで「里」を感じることができる．つまり、山裾寺院敷地は山と里との「両義的空間」であると把握できる．このことから，山裾の寺院は人々の暮らす「里」から，古来より神の降り立ち住む場として考えられてきた「山」まで意識がつながるような敷地が占地され造成されてきたということが推測できる.

（２）今後の課題

本研究では、寺院が建立された時代や寺院の宗派と占地との関係については触れていない．これが今後の課題としてあげられる.

【参考文献】

樋口忠彦　：　景観の構造，技報堂，1975

樋口忠彦　：　日本の景観，ちくま学芸文庫，1980

伊藤ていじ　：　日本の都市空間，彰国社，1968

斉藤潮　：　神社参道の空間構成に関する研究，都市計画学会学術研究論文集，1989，pp．457-462